



大ホールのステージから客席を望む。座席数は1,382。改修後、美しいアーチと暖かみのある色使いになった。コンサートやバレエはもちろん、さまざまな舞台にも対応可能な多目的ホールだ

撮影◎町田益宏

吹田市文化会館 メシアター

大規模改修によって生まれ変わった大ホール
スピーカー・システムも一新

〒564-0041 大阪府吹田市泉町2-29-1

tel. 06-6380-2221

web. www.maytheater.jp

主な使用機材

コンソール	Avid VENUE S6L-24D, VENUE E6L-144
DSP	YAMAHA DME64N
プロセシアム・スピーカー	L-Acoustics Kiva II×11+SB15m×2
サイド&カラム・スピーカー	L-Acoustics Kiva II×8, SB18i×1, SB15m×2 (上手/下手それぞれ)
仮設FOHスピーカー	L-Acoustics Kiva II×6, SB15m×2, SB18×2 (上手/下手それぞれ)
インフィル・スピーカー	L-Acoustics X12 (上手/下手それぞれ)
ステージ・フロント・スピーカー	L-Acoustics X4i×8
ステージ・モニター	L-Acoustics X12×6, X8×6, Meyer Sound MTS-4×2, CQ-1×2, 650P×2, Electro-Voice SX300 B×6, SX300 W×4, FM-1202ER×4, FM-1502ER×4
調整室モニター・スピーカー	GENELEC 8351BM×3
パワー・アンプ	L-Acoustics LA4X
ワイアレス・システム	SHURE ADX2FD/SM58-XX×10, ADX1-XX×10
ボディ・バック用マイク	DPA 4066-OC-A-B00-LH-S×4, IMK-SC4061×4, 4061-OC-C-F00×12, 4066-OC-A-B00-LH-S×6

今もなお、岡本太郎作「太陽の塔」が屹立する万博記念公園。それを擁する大阪のベッドタウン吹田市に吹田市文化会館 メシアターが設立されたのは1985年のこと。大・中・小3つのホールに加え、レセプション・ホールや展示室などを備え、吹田市におけるエンターテインメントの発信地として貢献してきた同館が、2020年8月に大規模改修を完了。中心となる大ホールの改修について話を聞いた。

30年以上の歴史を誇るメシアターだが、今回の改修への道のりには紆余曲折があった。もともとは2017年に大規模改修の計画があったものの諸事情で一部の改修のみが行われ、翌2018年春に再オープン。しかし、同年6月に起きた大阪府北部地震で最大震度5強に見舞われ、わずか2カ月弱で大ホールが使用できない状態へと追い込まれてしまった。当時のことを舞台管理課の前川幸豊氏はこう振り返る。

「この辺りの家は、瓦が割れるほどの被害を受けていました。大ホール客席吊り天井内の補強材にダメージを受けてしまい、再開するなら直天井にしなければならぬということで使用を中止していたのです」

その後、2019年7月から2020年8月にかけて、大ホールの復旧と併せて全館の改修を行うことが決まった。これにともないPA機材の入れ替えも実施。スピーカーにはL-Acoustics Kivaシリーズが導入された。

サイド・カラム・スピーカーは、左右に Kiva II×8、



▲サイド・コラム・スピーカー(写真左)。ももとのスピーカーはこの背面の奥まった場所に設置されていたが、その場所に鉄骨を組んで現在のスピーカーを支えている(写真右)



▲移動型スピーカー(写真左)。すべて台車に乗せて可搬性を確保しつつ、しっかりとホールドできるように壁にはスピーカー留めの金具が付けられている(写真右)



▶下手側2階にある調整室。今回の改修でコンソールもリニューアル。Avid VENUE S6L-24Dが導入された。「コンソールは安定性と操作性を考慮して選びました。いろいろな操作してもHISTORY機能ですぐ任意の状態に戻る再現性がいいですね(谷尾氏)」。また、モニター・スピーカーにはGENELEC 8351BMがセレクトされた



▲新たに作り変えられた天井から、しっかりと吊るされたプロセニアム・スピーカー。こちらの使用で、死角なくホール全体に音を届けることが可能



▲ステージ上・下手奥の天井裏に設置された、プロセニアム・スピーカー用のパワーアンプLA4X。



▲ステージ・フロントのスピーカー・X4i(写真左)。こちらの配線は、ステージ・サイドの下手から引かれている(写真右)



▲取材にご協力いただいた皆さん。左から、メイシアターの小林護氏、前川幸豊氏、谷尾敏氏、施工を担当したジャトーの松尾茂氏、岩川好宏氏、今村太紀氏、L-Acoustics製品を国内販売しているベストックオーディオの上田貴広氏

SB15m×2。SB18i×1を設置。ステージ上の移動型スピーカーには、Kiva II×6、SB15m×2、SB18×2を用意。プロセニアム・スピーカーとして、Kiva II×11、SB15m×2が吊られている。スピーカーのレイアウトにはL-Acousticsのシミュレーション・ソフトSound Visionを使用。改修前でもCADデータの登録により、改修後のスピーカーの設置箇所や角度等を緻密にシミュレートできた。改修前、スピーカーは見えない場所に設置されていたが、今回の改修によって露出する形で配置されており、美しいフォルムが新たなホールにマッチしている。

スピーカーのセレクトに関しては、2017年の改修予定時にほぼ決定していたという前川氏。その選定理由についてこう語る。

「以前は2階の奥までうまく音が届いておらず困っていたので、伝達力の高いラインアレイへの入れ替えが大前提でした。Kiva IIを選んだ理由は、コスト・パフォーマンスの高さ、位相干渉の少なさ、そして伝達力の高さです。おかげで2階の奥まで明瞭に音が届くようになり、どこで聴いても変わらない音作りができるようになりました」

しかし、新築とは異なり、古い躯体に最新のシステムを導入することは、想像以上の苦労があっ

たようだ。施工を担当したジャトーの松尾茂氏曰く「今回、新たにデジタルのネットワークを入れたのですが、デジタル配線の径が太いことから既設の配管に入らなかったため、既設で不要となった配線を極力撤去して敷設し直しました」とのこと。

大ホールの舞台の中に埋め込んでいるステージ・フロントのスピーカーについても、コンパクトなX4iを左右に4基ずつ設置したが、配線が難しく、舞台袖の裏に穴を開け松尾氏が自ら潜り込んで設置したという。

すべて200Vの電源で駆動させているパワー・アンプLA4Xは、アンプ室に押し込むのではなく、少しでも引き回しの距離を短くすべく各スピーカーの近くに設置。例えばプロセニアム・スピーカーのアンプはステージ上の天井部に設置された。これによりノイズの発生やサウンドのロスを軽減することに成功している。

かつて「音響家が選ぶ優良ホール100選」にも選ばれたほど鳴りの良い同ホールだが、今回の改修で天井から床まで作り変えたことにより、残響は約0.4秒伸びた。

「アコースティクスはすごく良い感じです。関西フィルハーモニー管弦楽団に最近演奏してもらっ

たのですが、かなり好評でした。一方で、以前よりライブになった分、PAを使用するバンド系の音はこれから調整が必要です。ただ、音が伝わる力は圧倒的に上がったと言えます(前川氏)」

「今回導入されたスピーカーは、癖がなく使いやすいというのが一番の魅力ですね。チューニングに関しては、今はおとなしめにしておいて、運用しながら修正ポイントを蓄積し、それを休みの日に少しずつ変えていくという感じで進めています。この先、エイジングでも音が変わってくると思うので、それにも対応しながら仕上げていきたいです(舞台管理課の谷尾敏氏)」

今回、大ホールと同時に中・小ホールも用途に応じた改修が行われた。また、以前ワイエのスピーカーは非常用のものが兼用されていたが、今回の改修で専用の配線を行い、ホール内との音質の差が抑えられていることも付け加えておこう。

「改修を行い、新しいスピーカー・システムが導入されて、ホールの基礎体力が上がった感じがします。伝えたいところに伝えたい音が届く場所になりました。ただ、“音響がすごい”だけが目立ってしまわないように、いかにお客さんに感動して帰ってもらえるかを常に考えていきたいですね(前川氏)」